

W.D. Miller 著 The Micro-Organisms of the Human Mouth
(ミラー原著：ヒト口腔の微生物)
翻刻版刊行に当りて

米澤和一* 田原保夫**

米澤が1973年11月16日於東京歯科大学講堂，日本歯科医史学会例会にて講演せるものの概要である。

(一)

始めに学術用語にふれて見たい。human mouth は，ヒト口腔であって，人（又は人間）口腔ではない。学術論文では，動植物名はすべて片カナ書きになった。ヒトではあっても人格を表現する場合の用語は人（人間）である。

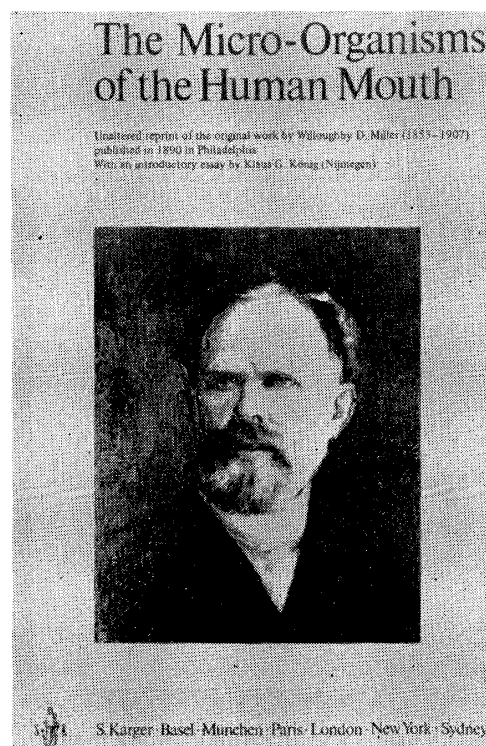
ここに11月13日毎日新聞朝刊社説「ヒトがカゼをひくということ」の書き出しの一節を引用する。「人間を生物学的にみる場合ヒトという表現がよく使われる。ヒトに対し人は文化，そしてその進歩した形といわれる文明との関連において，とらえられる概念といえる。人は高次の思想や思考を持つし，ヒトとは違うから，本能以外のさまざまな欲望や願いも持ち，さらに，それらをプログラミングして，具体化し，実現する能力もあるはずである。また，文化や文明は，人独りでは成立もしないし，発展もないから，人という場合には，それが社会的存在であるという意味も含まれるであろう。いま，カゼがはやっている。その被害は，乳幼児から小，中学生，おとなに至るまで広範な年齢層に及ぶが，果たしてカゼをひくのはヒトか，人なのか。云々」

次に Unaltered reprint of the original work は，翻（飜）刻版であり，復元（原）書の意味である。復刻版とも呼ばれているが，覆刻版，複版書と表

Unaltered reprint of the Original work by W.D. Miller (1853~1907) published in 1890 in Philadelphia and his contributions to dentistry.

* Waichi YONEZAWA 東京歯科大学

** Yasuo TAWARA 東京歯科大学



現する人もいて，それぞれ意味が違い，つくづく日本語のむずかしさに泣くものである。

(二)

1890年版英文の原本 The Micro-Organisms of the Human Mouth は，Philadelphia の S.S. White 社版であり，副題が「ヒト口腔微生物に起因する局所並びに全身疾患」で，著者は時の Berlin 大学歯科教授ミラー（Willoughby Dayton Miller, D.D.S., M.D.）である。B 5 版，本文・索引 364 p.，挿図 128，付図 1～2 は顕微鏡写真，付図 3 は着色石版印刷である。東歯大図書館の蔵書は，ミラー晩年の今一つの名著 Lehrbuch der konservierenden Zahnheilkunde, 1896 共々伊沢家寄贈のものであ

る（前者は初版，後者は1898年第2版本が蔵書）。

今般スイス国バーゼル市の S. Karger 社からミラー英文原著の1973年翻刻版が刊行せられ，直後の6月25日付で東京歯科大学々会機関誌「歯科学報」編集部宛に送付されてきた。因って私共がここに紹介の労をとったものである。

翻刻版が83年と言う長年月を経て刊行せられている為，特にオランダ Nijmegen 大学の Klaus G. König の解説文「D.W. Miller とその歯学への貢献」を巻頭に掲げる程の気の配りよう。次いで扉，ミラー序文，目次，引用文献 246，本文，索引の順に配列されていること，原著そのままである。

König の解説によると，ミラーが1881～1907年の間にものした学術論文 164 編が独・英・仏の専門誌に掲載せられ，著書もいくつかあったが，群を抜いて有名だったのは独り 1889 年独文の原著 *Die Mikroorganismen der Mundhöhle* であった（東京医歯大図書館蔵書）。その英語版に当るものが翌1890年出版されたのであって，まさに本書がそれであり，これぞ全世界で最も愛読されたものである。

本書は二部十二章より成る。第一部は一般細菌学の研究，特にヒト口腔の細菌であり九章より成る。その第三章は口腔寄生微生物研究の展開・細菌学的研究法であって，本章は独文版には無く，英語版になって初めて追加起草されたもの。本書の内容を点描するに，第七章は齲蝕に関するミラー独自の研究，第八章は齲蝕の原因，第九章は齲蝕の予防，となっていて，これぞ何人の追隨をも許さぬミラーの独壇場であろう。第二部は病原性口腔細菌とその感染症，と題して三章をもつ。

古典ブームの風潮とは言え，今から83年も前の細菌学発達の極く初期に刊行されている鑑の生えた，古いミラーの原著の翻刻版が，なぜ科学が日進月歩の今日刊行されたかの理由について，その幾つかを König が挙げて解説しているが，その全文の紹介は別文で述べたい。

原著は絶版で入手し難いから翻刻版が出たことは別として，内容の志向するところは，さすが齲蝕の原因に対する化学細菌（寄生）説 *Chemico-*

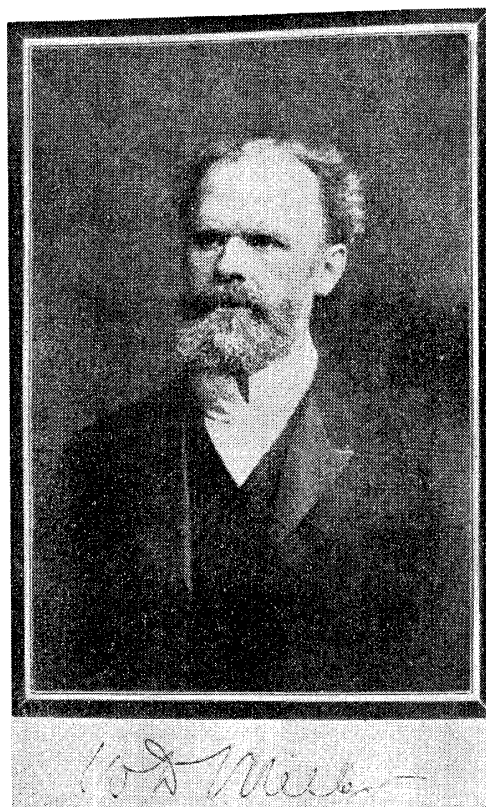
parasitic Theory を打ち立てて，口腔細菌学の父と後世仰がれたミラーの著書だけあって，今日の科学の進歩から見ても決して陳腐ではないと言える。目下学界未解決の多数の歯牙の問題，特に齲蝕の原因を科学的手段で解決するには，ミラーのこのユニークな研究の原点に戻って，再出発の必要もあろう。それには本書は暗夜の灯明にも等しき，好個の参考書ともなるのではなからうか。

前頁の表紙にかけられたカバーのミラー肖像画は，ついぞ見かけたことのないもので，作者不明と断り書きしてある。翻刻版の石版印刷の付図が原著と異なりカラーでないのが残念。これでは人工培養菌の産生色素の点が一切不明。定価は 19.85 U.S. ドル。

（三）

ミラーは，1907年7月28日虫垂炎で54才を一期に逝去する直前に帰米している。本邦でも氏の逝去がいたく惜まれ，同明治40年12月，歯科学報12巻11～12号（合併号）がミラー博士紀（記）念号として刊行されている。

巻頭にミラー博士の肖像が氏のサイン入りで掲



げられ、記念号の題辞の後に氏の数々の業績が、東京歯科医学院（廃校となり東京歯科医専校に昇格の直後）の当代第一線の四教授により原文の翻訳されたものが掲載され、追悼号にふさわしいよい企画である。「口腔内醗酵及其齲蝕トノ関係」（奥村鶴吉訳）、「口腔及歯牙ノ疾患ニ関スル免疫性総説」、「免疫問題ニ関スル其後ノ研究」（以上、小川勝一訳）、「歯組織消亡ノ研究」（佐藤運雄訳）「将来ノ歯科医育ニ就テ」（水野寛爾訳）の五編の他に、ミラー博士小伝（後掲）が血脇守之助の名で掲載されている。また故人生前の功德をしのぶ誄詞（るいじ）に当る詩（誄詩）が、早川可美良によってよまれてもいる。

○ミラー博士小伝（原文のまま、ただし平仮名に変更）Biography of W.D. Miller, A.B., D.D.S., M.D., Ph.D., Sc.D..

斯道の碩学 W.D. ミラー博士去七月二十八日病を以て逝く、余輩博士の高風を慕うもの、誰か一掬の涙なからん、誰か一片の辞なからん。

博士久しく独逸に在り、斯道の研鑽と子弟の訓育とに従事すること、茲に二十余年、一朝名誉の地位を棄て故国に帰来し、本年十月よりミシガン大学歯科学長として、後継者を養成する予定なりしが、端なくも盲腸炎に罹り終に起たず、享年五十四、嗚呼悲哀。

博士は1853年8月1日合衆国オハヨウ州アレキサンドリヤに生る。父ジョン H. ミラー氏農業に従事せしを以て、博士も亦村校に通学の傍ら耕耘に従ひ、父を助けたり。当時現に出藍の誉ありしと言ふ。十三歳の時両親に伴はれてニューアークに転居し中学校に入学す。1871年卒業、直にミシガン大学に入り、四年にしてA.B.（バチェラー・オブ・アーツ）の学位を獲たり（11歳）。其秋英国に留学しエデンバア大学に入り、化学、博物学及数学を専攻す。居ること一年独逸に転じ伯林（ベルリン）大学に於て更に前記学科の研究を続け、心竊に砥山技師たらんことを期せり。不幸にして過度の勉強は博士の健康を害し、翌年終に其学業を中止するの已むを得ざるに至れり。

偶々ドクトル・ジェームス・トルーマン旅行の途伯林を過ぎるあり、博士之に師事して歯科医学

の一端を窺ふを得たり。当時ドクトル・フランク・アボット伯林に在りて、米國歯科医間の牛耳を執り、兼て學術界及社交界に於ける高位置を保ち居たり。アボット氏の夫人は駐独米公使の令嬢なり。博士亦米國歯科医間に交際し深くアボットの知る所となる。茲に於て博士は終に一生を歯科医学に捧ぐるの念慮を起こすに至れり。

1877年米國に帰り、旧ペンシルヴァニア（略称ペン）歯科医学校に入り、齒科学を研究すること二年、1879年ペン大学齒科部（前記改名）に於てD.D.S.（ドクトル・オブ・デンタルサージェリー）の学位を受領し、直に伯林に帰りアボットの門に其業務を執る。此年十月アボットの令嬢と結婚す。同時に医学の研究に従事し、有名なるコッホ博士と細菌学の研究を始む。後幾許もなくM.D.（ドクトル・メデチーネ）の学位を得たり。

1880～1890年迄現皇后陛下及各皇族を拝診せると、博士の学界に於ける功績とにより、皇帝陛下は特に枢密医官の榮譽を博士に授けられたり。此榮譽は曾て米國人の享受せざるところ、又曾て万国齒科医の享受せざるところ、博士の名誉も亦大なりと言ふべし。

博士斯道に入りてより、其発表せる研究業績は頗る多大にして、齒科医学を裨益せること少からず、万国の同業者皆推して斯道のオーソリティーと呼ぶに至る。博士の始めてA.B.の学位を受領せしミシガン大学、博士に贈るにPh. D.（ドクトル・オブ・フィロソフィー）の名誉学位を以てし、ペン大学は博士に贈るにSc. D.（ドクトル・オブ・サイエンス）の名誉学位を以てするに至れり。

伯林大学に於ては、博士を挙て齒科講座の教授となし、1884年帝室教授の榮譽を与ふるに至れり。蓋し外國人の未だ曾て享受せざるの榮譽なり。後博士又医科大学教授よりExtraordinary Professorship（特命又は員外教授）を以て擬せられしも、其内規として独逸人ならざる可からざるを以て、博士は独逸に帰化するを肯んぜず、終に辞して受けざりき。

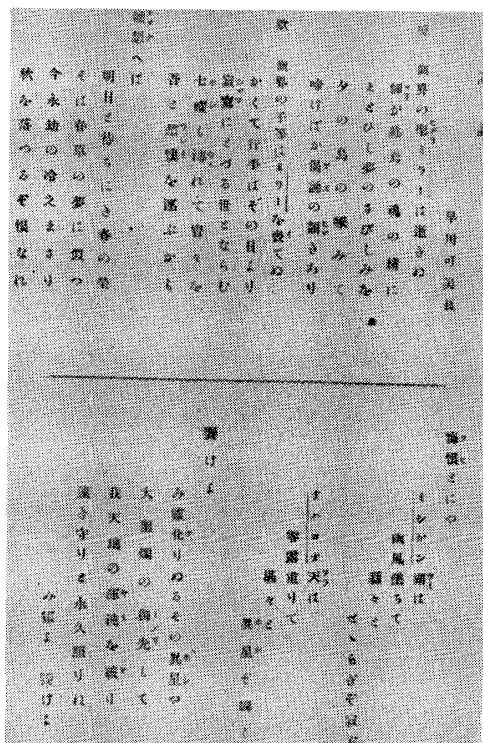
始め博士の伯林に齒科医術を試むるや、独逸齒科医の嫉視反対を受くること夥だしく、終に文部大臣に迫りて博士の教授を免じ、独逸人をして代

らしむべしと言ふに至りしが、後遂に独逸歯科医の屈從に終り、専門雑誌は競ふて博士の業績を、我誌上に登載するの榮を獲んとあせるに至れり。

博士は独逸は勿論、全歐洲を通じて同業者間の尊敬を一身に荷ひ、在欧米国歯科医会、独逸歯科医会、独逸歯科教授会及万国歯科會議（FDI）の会長及四十有余の学会名誉会員として名声世界に嘖々たりき。

博士は毎日多数の時間を研究室に費し、孜々として実験に怠りなく、其最も有名なる著作は口腔細菌学（The Micro-Organisms of the Human Mouth, 1890）及齒牙保護療法（Lehrbuch der konservierenden Zahnheilkunde, 1896）の二者なるが、外に発表せる業績一百以上を数ふと言ふ。博士の如きは真に斯道空前の偉人と言ふべきなり。嗚呼誰か博士の衣鉢を伝ふるものぞ、誰か博士の衣鉢を伝ふるものぞ。

左に博士の發表せられたる重なる論文を掲載せん(略)。 以上は血脇守之助の原文の転載である。



詠 詩

早川可美良

アア
噫

齒界の聖ミラーは逝きぬ
師が終焉の魂の緒に
まとひし夢のさびしみを
夕の鳥の啄みて
啼けばか偲誦の韻きあり

ハナシ
歎

齒界の子等はミラーを喪てぬ
かくて行手はその日より
寂寞にとづる世とならむ
七曜も薄れて宵々を
吾と愁懷を運ぶかも

オモ
緬想へば

明日と待ちにき春の榮
そは春の夢に似つ
今永劫の冷えまさり
秋を落つるぞ恨なれ

ウヒ
悔恨とにや

ミンガン湖は幽風墜ちて
瑟瑟とせせらぎぞ寂ぶ
オハヨオ天は零露重りて
湛々と異星ぞ瞬く

ウ
饗けよ

み靈化りぬるその異星や
大聖燭の御光もて
我天地の渾沌を破り
遠き守りと永久照りね
み靈よ饗けよ